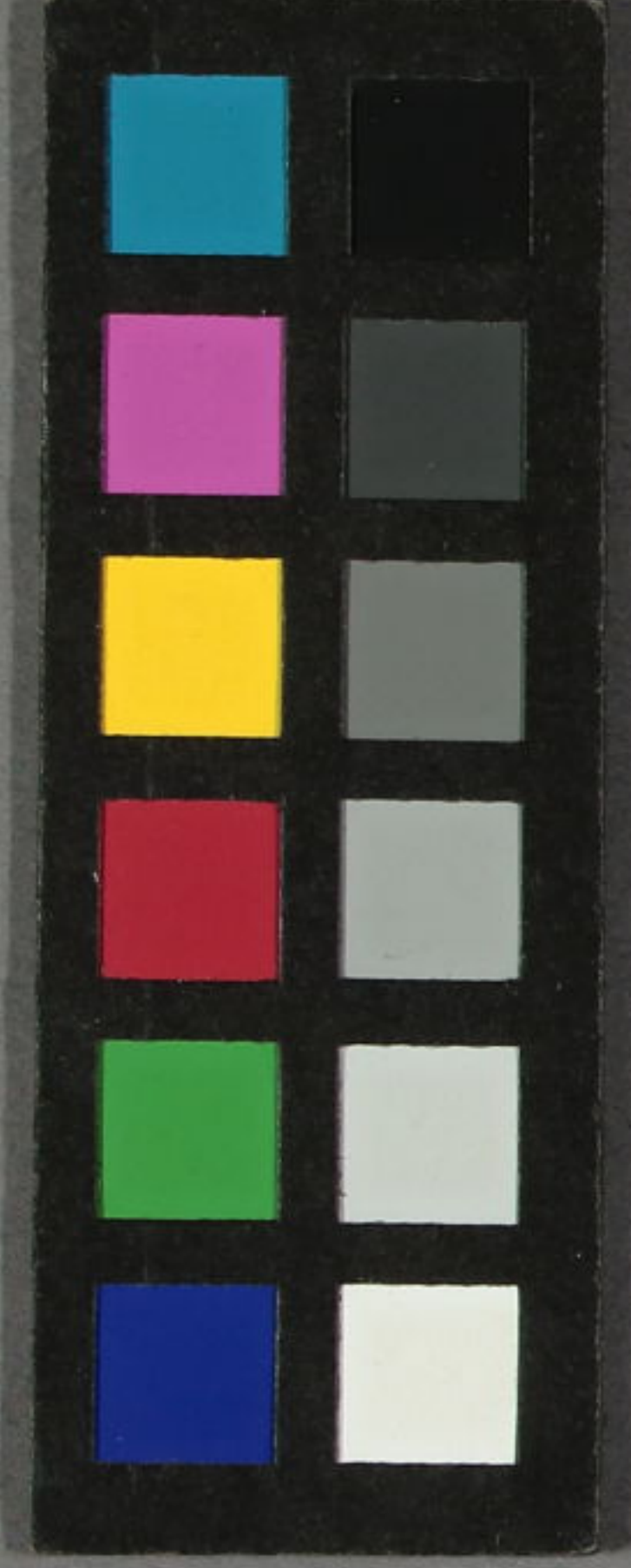




秋元藏書



沙舟全集

多の菴の裏の雨窓つら／＼ 訪ひ来る人の垣根よ
けふ秋草の荒れはきこえおそれよきわ／＼と
たづねの月を夜ふくみ窓になくおれぬを
とれぬはか／＼と空に古き發句を引き
あそびは客のそとにありてありてあり
四季にわたりて遠國の松の正月の雪く／＼と
煤掃の跡をきこえ／＼とありてありてあり
此後とてきこえ／＼とありてありてあり

凡例

は集題の他例を考へ證句或あるをなれど
古くは句或あるに載す中より古人より名句の或る
あはれも歌のふたゝあつされば載せ今の人れ句を
その歌に句の或るを載せたり

四季の題は事並にふくむれ御筆を載し多かる

類ひ載せりやゝちと増出并新式古今抄
に春拾遺よりかき物多し等々の題を載
考へ題の取捨をせ

四季の歌は中附句の用よりて歌句の歌あり
多し是れ取捨又四方解ふ馬節令の歌
事の人れ多しやゝちと増出并新式古今抄
に春拾遺よりかき物多し等々の題を載
考へ題の取捨をせ

その姿情哉と云ふれ載る
四季の歌に神祇社の神夏法寺の法事の歌
悉く證句哉奉るに云ふれ云て遠支國の
事外と云ふ者候と云ふれ載るたふ東海
まれと云ふ祭見及び云ふれ某種御依鞍馬の歌
等他國云ふ二月事の云ふ筑摩祭等の云
及ひ云ふ歌一二云ふ何哉奉る云ふれ余
何れと云ふ

四季の歌乃中生歌植物の類り古今に
發句なりと題哉と云ふて云ふ句を云ふ
後の人云と云ふ事と云ふ

四季の歌乃中生歌植物の類り古今に
發句なりと題哉と云ふて云ふ句を云ふ
後の人云と云ふ事と云ふ

四季の歌乃中生歌植物の類り古今に
發句なりと題哉と云ふて云ふ句を云ふ
後の人云と云ふ事と云ふ

好く附録す

此者の次で成つたもの中、句の好悪を以て
此の此者の時代と云ふ者、よくいふべき
同時代人を混して云ふ

秋元藏書

春四

類題發句集春部

正月

蝶夢編

元日

元朝や非代の事もおもはれ
草も木も目出度きうけけり
新夕老人も先づ今朝の春
元日や何よたふらん物あり
えりて田この日をそとれ
元日やあつて鏡りの太刀帯
元日や晴く春を物うけ

伊勢

守武

京

貞徳

難波

宗因

江戸

忠知

伊賀

芭蕉

京

松来

谷

嵐雪

花の春

立春

初日

初節

初鳥

花の春 子ゆき 花の春
けりて 花の春
春立る 花の春
初日 花の春
初節 花の春
初鳥 花の春

専吟 云来 許六 野坡 色蕉 任行 支考 可風 野坡 馬明

春入

初爰

祇園

年徳

元方

門の雲

初爰 元方 門の雲
初節 初鳥
初日 初節
初鳥 初日
初節 初鳥
初日 初節
初鳥 初日

李吟 安室 百川 望一 休亭 一峰 夕道 吻軒 去来 去来

しの竹
 葉采
 標
 かきり縄
 のしり炭
 かきり海老
 着水

松かきり伊勢かきりふ人冬終
 ころころやきりもきり山鹿井
 ころころ東雲まねくそきり
 山鹿井かきり家の大かきり
 松ついで千代系代わかきり縄
 かきり縄や千代の白れくろの
 深山木や林表まきりろり炭
 伊勢海老やまきりてきり脱く
 かきり水やまきりろり脱く水
 ころころや冬あきまきりてきり

其角
 嵐南
 順也
 立圃
 可全
 移伴
 眠魚
 玄梅
 武仙
 野坡

大ゆ
 乾葉
 萬固
 饅餅
 扇種

着水やきりてきりろり脱く
 かきり水やきりろり脱く
 大ゆかきり冬あきのまきり白れ
 乾葉や千代の敷の脱く
 同かきり冬あきのまきり雑葉
 ころころかきり脱く白れ
 山鹿井かきり脱く白れ
 山鹿井かきり脱く白れ
 山鹿井かきり脱く白れ
 山鹿井かきり脱く白れ

乙由
 古山
 防川
 自悦
 如行
 北枝
 巴雀
 扇種
 立志

大第 蓬萊 喰積 野を 加栗 串柳 續儀

大第我々もへきとく内儀は
 姉の著や大鼓の役の持て先
 蓬萊より吹てや伴助のて川使
 ほくらんは呪といふ歌同もあき
 くは津も木骨の口ひの松より
 初算のまゝとて入るなり野を
 如杓あき懸懸のうらた飛老
 かち栗や餅りおとては思ひ
 夕一柿やあき一投り居るん
 續たけや炭の炭炭あきとる

把ち 卯七
 加賀 秋之坊
 山店
 岱水
 其爾
 和暢
 長英
 一思

春七

橙 けり者 数子 庭竈 福菜 初曆 書始

けり者連ふり何はあし者
 かとけりや我々不鼓そ花の表
 敵意あきによりふ氏や庭竈
 庭かまや牛も難黄ひなり
 福もや菜もいふ物も英一
 けりふらぬさうも物初あき
 一度も入るにき安し初曆
 集ひあきむとて文字の書き
 大津画の筆れり光る何佛

文儀
 千綱
 芭蕉
 其角
 千代
 乙由
 宗雨
 宗瀧
 芭蕉

馬松始
弓矢矢
松葉始
若衣始

昔て先や柳松の庭の十文字
糸初り下まのあさるの春
袋うゝあさるも目まゝ一弓矢め
毎々衣小雲り雪の松り危
若衣始まの鼓も松り矢
母衣衣松矢矢つーや若衣始
福葉の春あつと一若衣始
とふのの波の鼓や松もや
高砂や大おれあつと一松始
とれも松葉の仕入を祝葉矢

江戸 湯門
近江 木導
尾張 留房
尾張 旦葉
江戸 玄旨
伊勢 山蜂
京都 春波
京都 今徳
南河内 魯中
江戸 友之

高始
柳上
柳初
若開
湯慶始
若解
多玉

初市や雪は清まゝの若葉松
さ川市や葉も海衣さるり詞
一と名の公さゝ先や柳初
すれそ先や解氷を引起し
津ちのとれ実八で祝へ葉ひま
家子たより出れせん花さる
月雪衣さるれ後人初湯慶
初解り師走のさるさる危
若解や晴葉のまて梅あつ
と玉柳打る小節の春れ

伊勢 嵐園
江戸 温故
江戸 琴風
伊勢 雲木
京都 立圃
出雲 琴風
美濃 船男
尾張 和氷
京都 已靜
京都 言水

力威

太馬

鳥追

春駒

猿引

初葉

秘步

少玉の葉もあけりて親の里
萬葉や薙もうふも欲けり
連てきて子も薙せり力威系
系威やたけりむね松陰
許家より入るあやう老福の井
名連や時り初葉す川太馬
妻あやや村の町も小太馬
猿染り入るあやうやさる也
いも薙る川系も太馬太馬
長生とあへる人々秘歩

江戸 宗陽

京 柳蓋

尾張 一井

山陰 去来

山陰 飛明

但馬 仙若

但馬 柳飛

京 巴靜

近江 秋月

近江 狸遊

春九

妙り

中球

羽子板

やみ子

破魔弓

寅引

いねつぎ

妙りやあやう系乳の枕小太
振神とけきにて奉て手鞠れ
とこ板やた子同出度う替へ
きり子やゆきあやう妹も
やうとこやあやう交う多女房
とゆきや乳母も多系う二人張
寅引り蛇牛の角状たぐく
寅引り夜を床ぬ敷の種り乳
寅引りや力であやう巴との
編つあやあ方の方へ枕せん

京 望雲

但馬 孤舟

江戸 嵐雲

江戸 利牛

伊豆 木導

伊豆 松舎

近江 其角

加賀 李由

伊豆 雨青

伊豆 朝井

年男 水祝 子日 小松引 若菜

ちきりや十日の雨乃降ち免
 松の下幾千代々歌々男
 水祝 男子秋樂と習ひりり
 板の乃に解ひらまより水祝
 ちきりや女房松をん水祝
 一生のちきり保や水祝
 ちきり春と能高さん初子日
 喰へもせぬおとり出る子の日
 己今日也植ち移して小松引
 其弱又ちかゝる若菜は

京 晩山
 重軌
 京 舟泉
 春澄
 其角
 祇川
 松来
 也有
 台尼
 也蕉

春十

一もとり一交摘ちて赤くれ
 七色子若菜つと出るちきり
 ちきり若菜甘くも初子烟くれ
 常と畑ち出あふ初子菜は
 摘ちて踏付ちて初子若菜は
 芥かひか端とこち初子の尻
 酸くもて若菜つと出るちきり
 ちきり那や鶴付初子足跡
 情おちち摘ちて足あ若菜は
 ぬれ縁や若菜は出るちきり

大芳
 楚水
 浪化
 踏通
 惟然
 万子
 柳風
 野水
 嵐雪

空しくと雪付て来とある葉黄
 ぬれぬく水より七草より水
 此のふとあつた花はあつた
 花葉つむ指の太さどあつた男
 志め花まで許そ負へ雪のあつた
 七種やぬぬり聲は枕の
 ととととと顔は白へふ花は
 鶏よりひよりささふ花は
 今のふと花の春花たふや
 七草や唱哥ぬく花の口の中

北枝

薯粥 福涌 初雷系 木以芽漬 卷下—

笑ふく酒をちぢるあひだ
七くさや次をたぐふは骨
まね板よきむし 薺を煮る
それをもたけあひのふく
水鶏をもちひるをのふく
薺取く形をもちあひ薺を
ゆくもし薺を餅の水の月
さひの薺の汁をてまひる
薺をゆくもちあひのふく
花をてあひのふく

其角

具足鏡用
大義長
綱引
小豆粥親ふ
粥はしら
粥杖
節振舞
雲の内

雪の残る地へくわれと春あけし
浮世海老の鏡ひよや具足櫛
ひのふやたしとやまを大義長
大義長や横電あてぬより
綱ひよや雲よほいふ神の意
春後のちのくにぬや粥くら
かやはえよぬきりてうきぬり
おはあやうしお役や如田のそ
雲取く串の船日よ来より

京 風園
許六
李吟
京 我鷗
尾張 龜遊
近江 冬粒
系 三敲
近江 孟遠
江戸 不角
春十二

昔宵
御忌
木地娘
敷入

雪あけた者へ来きり松雲内
正月も廿日なりぬき新葵は
松崎身ぬきへいぬきの鏡
ちのち女侍のきや御忌の子
梅咲く木地の娘の白うれ
雲又へや牛合点へて大系近
やふへやちぬふぬき
敷入や笑きへる親あろ
あふ入のふ夜たのく文はり
雲又入りてのきぬき火煙は

近江 玖石
系 嵐雲
其談
陸奥 玄音
其角
近江 軍庫
冷天
江戸 咫尺
連之

木の芽

伊豆 我羊
 系 素流
 近江 琴風
 廣瀬 文素
 尾張 露泊
 京 素澆
 伊豫 久北
 近江 雪芝
 生駒 生駒
 春十二

春十三

下崩

莖立 若草

二川
 北溟
 芦泊
 松舟
 此筋
 鬼市
 已百
 風騷
 杜菱
 温故

梅

日よきの人しくを来りしり
 敬との歌きり山か子のおまき
 梅より月の日の雪山海
 山里あゝ萬葉連しむる花
 なるけ枝のさびや梅のふ
 梅の花先き咲きてあけいれ
 け枝り脈やかさひく妻の花
 望み咲様りつ月おや梅のふ
 雪ににきうさう梅のふれ
 瘦てて雪にさく梅のふれ

其角
 来山
 文考
 尚白
 洛通
 太来

月よきく正月やい妻の花
 梅のふや火焼を去るまき
 立ちぬ木もさひり梅のふ
 雪も小首ひ初めや妻のふ
 妻一ふん一輪梅のふ
 妻先咲や月の野分れ枝のふ
 ちりくり咲梅のふ
 枝ありは様付てや妻のふ
 妻のふに月おきや妻のふ
 暮るぬ人おきや妻のふ

猿雄
 深菟
 金羅
 風雲
 地坡
 云芳
 惟然
 桃路

のみは海をのりて救ふけ妻の心
 来ぬるの心乃隔や梅も春の心
 梅の心おとすよつゝめ糸を分
 る免えやふ今里あるし角
 枯るは昔より梅も免の心
 久しとて子なりう妻の心
 何ぞ我より梅も免の心
 寒苦しとて梅も免の心
 十八町より里あり梅も免の心
 妻も免や片枝も免の心

前川 信長 裁人 勾空 後古 挑化 乙由 菅九 柳居

春十二

柳

何ぞとて免候とありや梅の心
 妻も免や何れ梅も免の心
 梅も免や何れ梅も免の心
 八九町より里あり梅も免の心
 今とて柳も免の心
 風やんき候とあり梅も免の心
 乙六町より里あり梅も免の心
 風ありとあり梅も免の心
 乙六町より里あり梅も免の心

嵐七 千代 五筑 芭蕉 不角 木因 其角 久考

海より月ゆくあはれ柳の
 海より月ゆくあはれ柳の
 吹度と蝶の居る柳の
 柳の海を揺る川を弄る
 引くもくがけのうき
 人々の中へききあはれ
 何んぞと日のあはれ
 木立の眠りあはれ
 倭子と月のあはれ
 川と海とやうきを弄る

由平 心ろ 一笑 文子 浪化 形坡 吟風 素龍 此節

風のゆくあはれしるの柳の
 風のゆくあはれしるの柳の
 又とくもやたむけの柳の
 海より月ゆくあはれ柳の
 吹度と蝶の居る柳の
 柳の海を揺る川を弄る
 引くもくがけのうき
 人々の中へききあはれ
 何んぞと日のあはれ
 木立の眠りあはれ
 倭子と月のあはれ
 川と海とやうきを弄る

種水 牧亭 小春 蘆子 山川 松後 助豊 乙由 木咲 柳居

嫁と死

落の棠

春柳や花さく水より雨し死
蛤を食くもへく遠く春の乳
さんゆと水より漬る柳より
何とぬく二月よ来し春の形
青井やぬきぬる春の色
凍解りぬる春の味や落の棠
柳よりぬる山の乾きや落の棠
そのふし紙燭消てもぬる棠
ふし中になぬ春の味や嫁菜は
二葉より春の味やぬる棠

希周 風之 文素 乙兒 秋瓜 米壹 燈坡 楓林 すすて 一字 春十七

當菜

水入菜

渡菰菜

芥

角とむ芦

種は生る小鶴やゆき當菜
くくは菜葉を賣るのふし
おひらりと生る京の水菜は
我事と飯のふし根芥は
ふしはれさぬふしぬ田芥は
芥はれやむふしぬ田芥は
若菜よりぬきぬ根芥は
川流や淡哉やふしぬ芦の角
ふしぬふしのふしぬ芦の角

東流 馬六 尚ふ 太早 拳白 十丈 乙語 猿鉈 三惟

松若緑

のりとしうぬぬ雲のふり

京

滴水

結る道の小雲や若ふり

涼菴

思深こは松のそとや若ふり

六芳

候そや砂の松若ふり

條愛

雲の花

くみ走る雲ぬ交ふと雲のそ

長徳

伊賀

慶元

夕風や雲の花ちる若ふり

永

冬季

千大根

あやめ嫁菜より若ふり千大根

後河

信位

妹の雲れ白ひわは千大根

葵旦

海苔

皺るる雲や水の海苔

北溟

海苔の雲れ白ひわは千大根

素流

春六

龍葵

春風より雲末をさやとせ袋

永

守中

龍葵ふく池の梅のちり

若菜

山椒の皮

山椒のかく皮さうとせ

通

海苔

川水や何りそ海苔の味

其角

海苔の吹なうけや磯の

下総

素丸

のり取やさくへと波を立ゆり

永

免在

若菜や浪の底まで雲の色

永

一軒

鶯

くみ走る雲ぬ交ふと雲のそ

長徳

慶元

あやめ嫁菜より若ふり千大根

伊賀

葵旦

妹の雲れ白ひわは千大根

後河

信位

海苔の雲れ白ひわは千大根

永

守中

くそむけや傾く葉はる様は
黄をやみ枯葉と踏む
くくひまの刃と近うおそく
空久龍や葉の木細く夜
鶯や内のも啼きけり
くひすやせしきとわたり
黄をやみ根もきく聲の中
くそむけにけり息は朝
常やつるき下り木の花

色花 荷子 之角 大子 玄来 文考 木固 地坡 山雲 北枝

春九

黄をやみ啼て鳥はる様は
黄のひきいと出く木
黄をやみ一葉も念入より
あうりきとけり
くくひすの刃と近うおそく
黄をやみ根もきく聲の中
くそむけにけり息は朝
常やつるき下り木の花

如行 斜枝 利牛 紀河 曾西 性成 十丈 反朱 浪化 林如

常の加はるはへ起てり
 くるまのふしも持ち初音
 黄もやあゝもあの方うに
 五子鳥都あふ春日あふ
 川と春あふ梅を百ちや
 鶯あふ春あふおそ春の
 暖やさえつるあふ水うも
 白魚やあへうあふ月と似の
 白魚やあふ春あふあふ
 白魚やあふ春あふあふ

其角 尚ふ 乙筑 應元 童子
 其角 尚ふ 乙筑 應元 童子
 其角 尚ふ 乙筑 應元 童子
 其角 尚ふ 乙筑 應元 童子

春二十

白魚 水鳥 百子鳥
 常の加はるはへ起てり
 くるまのふしも持ち初音
 黄もやあゝもあの方うに
 五子鳥都あふ春日あふ
 川と春あふ梅を百ちや
 鶯あふ春あふおそ春の
 暖やさえつるあふ水うも
 白魚やあへうあふ月と似の
 白魚やあふ春あふあふ
 白魚やあふ春あふあふ

其角 尚ふ 乙筑 應元 童子
 其角 尚ふ 乙筑 應元 童子
 其角 尚ふ 乙筑 應元 童子
 其角 尚ふ 乙筑 應元 童子

春風

雪解

春風や三保の松系法入寺
矢の点二ぬ方も度春の風
旋子の尾は春風ゆく日影は
もろのせや汐の裾より松の香
唄あや猿人あけ春風凡
春かきや布は水きく小石系
かきうひのそるあやや春の風
雪かきあけ春の風
春風より山と栗の枯葉は
雪解や於へ出く下駄の跡

春北一

免責 許六 尚六 潘川 加賀 既白 春渚 康工 蝶後 治徳

雪汁 雪乃 残雪

雪解や朝の刻木のきり取
かきまけく炭火くさる雪解は
雪とけて中川残り来れ
雪にぬやととれあけ春風系
雪汁や喰いうけ切あき
候く下駄の雪乃れ雪乃れ
炊起て煙灰見さる雪乃れ
雪のきくともく雪のき
のきく雪は雪のきく雪乃れ
雪のきくともく雪乃れ

水魚 青雨 暖巻 木心 乙妙 乙角 涼老 心秀 虚云

春雪

春の雪雨かきよふく世ふり
是よりくくとして春の雪
下前の系色さけや春の雪
くくくくや梅の枝さ下前の
好子枝の節さくけり春の雪
侯雪や一つさくく春の雪
傘さる雨さく候やふの雪
凍ぬやさくさく梅の枝
雪よりほろりと毎の氷うれ

戦後
鶴岡

文考

一笑

李田

伊賀
免日

永
吾仲

尾張
氣彈

已靜

去芳

小枝

凍解

春廿二

水ぬるむ

凍とけや去るのふきのゆく
好子啼てひのいきり氷うれ
まもも氷はふり川に那
舟はやめり候あつ枝の足
残條の小唄も雪や水ぬる
あつむむはやふ流もけりふ
及びかく候とく水ぬるむ
おひくると氷の枯木も流る
春あしや流るれふも胡る
あり候り枝さく山のふり

駿河
一海

永
仙行

蝶愛

己筑

近江
軍賤

丹後
阿彦

天保
文水

秋風

芭蕉

言水

夜

清夜

きまの麦や菜種や朝うら
まの心て時を来ひくたかをみ
菜種や菜種もろや和夜
仲り帆の折るやろくろか
あゝあふふと来るる夜うれ
海波の立かろてや朝うら
帆残るる輪廻の七も朝うら
菜種うらの空を捲く宵のか
夕暮や寒哉と後と清うら
我ちかき清と折るる夜うれ

光頃 荷兮 希因 多醉 又 後川 尺布 坐泉 子恩 蝶愛

長閑

のろろや海かろく海客よ
も菜種に物も心ぬ朝うら
長閑さや空の折るも三ヶ一
うろろや田の中もろく水
うろろやあか布も物く仲の石
も菜種一さろくあゝ飯乃
あゝあや空もろくもろく
長閑さや美もろくもろく
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
暖るるもろくろくろくろく

木節 杜園 利牛 一有 碩氣 菜丸 雨什 雲國 秋風

暖

饒寒

今迄の行つてゐる事を
 擡つてまゐるが如く改訂が
 彼等あきらむる一夜即ちとい
 ふ所は昨日の如くある事な
 らうけれども彼等餘り
 戸中無事といふ田舎に
 居るゝ分には大抵大抵
 代保非や等といふ事

牙加合

佐保水

支考 仙化 孤通 乙由 文素 文素 泥足 氣彈

二月

春六四

二日矣

初午

ききと地や身あぢきと採笑
親の悲きぬ二日笑うれ
き午や建敷くして御戸用
初午や下向と碎く長老顔
はつむきや忘る楊くら赤の飯
き午や杯宜は化るる夜を度
醒せよあまめく蝶の袂うれ
穢真や改むらふまての日くら
地きみの地ききるる葉の形
傍協の顔と背くらきくら

釋奠

新の能

近紅 千那
伊魯 老士
 地坡
示 吾仲
 山只
 也有
 其角
白戶 宗子
 治德
 饒受

二月老修法

湯藏松明

涅槃會

水とやうに傍の諸方より
吾けと美徒の水をめぐり
松明や諸方より
青明といふに風の出る
歎息の聲あり
涅槃會や彼れを
孫子やとて
をりふあり
乙人も後教
木仏も

色蕉
玄梅
方山
神明
季吟
芭蕉
孫子
己百
許六

香世五

涅槃會や片肌
神も
有る
涅槃會や
大佛や
志僧り
手枕の
至愛
神も
涅槃會や

謝松
九次
言水
不玉
乙由
木兒
五川
入雙
止弦

驚き居るもさきくは
指し夜や埃の棟木のるれま
何れへり水もさきに後月
公の素衣に格如おほるは
木の葉さきもさきくは月
登るくは花も代や撫つ
忌もさきもさきくは腫る
帆柱のほろもさきくは
六条より波もさきくは
ちる花のさきもさきくは

春七七

春
素衣

徐寅

永
希周

范宇

春渡

伊勢
梅路

唐元

可風

政白

秋瓜

出代

夕暮れも海も水もさきくは
登るれもさきくは月
出からや花もさきくは
紙屑や出らるる波の
おろのさきもさきくは
出都るや猶うさきくは
おろのさきもさきくは
出代りかきくは
おろのさきもさきくは
出からや花もさきくは

三河

采林

嵐雪

永世

李由

李由

李由

李由

李由

李由

李由

李由

李由

陽炎

出かろうやゆき借屋よから借を
 出のりや櫓りあまたあはれのみ
 か夢やるのあしを柱てり
 か代老運や釣籠の軽ひと
 出かろうやあはれ雨のあはれ
 せ代のりる名とへる鼻のり
 か夢にかりてあはれおとろ
 牛の氣のりへるあはれ男のり
 拭へる戸のりあはれ名あはれ
 かあろうやあはれあはれあはれ

永友元
 伊勢 龜子
 乙虫
 かん 乙人
 龍 伊豆
 和泉 二曲
 伊勢 芭蕉

かけろあ我肩より紙衣が
 陽炎やほろくあはれ屋の砂
 うけあはれ被風のあはれ如意珠
 かあろうやあはれあはれ夜の雨
 陽炎やあはれあはれのあはれ
 糸柱やにけあはれの人あはれ
 うあはれあはれあはれあはれ
 糸柱やあはれあはれあはれ
 いあはれあはれあはれあはれ
 陽炎やあはれあはれあはれ

乙虫
 天無
 立志
 乱糸
 傘下

夢化地成
 朝鷹
 殘尾鷹
 仰り松
 仰り山
 智の村

かけろふや川の海に蛇う
 うきろふまふのふみや車道
 陽炎や横り海にう酒の桶
 かき海ふやテおぼく所お中
 夢化と世の代あり蛇の走
 朝鷹や出ると戻るとふり
 とやあきの尾はけいさう白毛
 月入く星と枝松や仰り松
 おろふ山おと月さつ仰り山
 空消く大声あくお小るれ

龍掌
 普山
 亜瓜
 枝系
 其友
 貞位
 那水
 鶏口
 龍龍
 松儀
 春九

鳥文
 智の巢

蛇うやすつあさふ漢ま
 つうたふ名や鷹たふ年の計
 巣とさふ名や在さう一造化
 春風りまふさふをむ花うれ
 糸柳巣りりくふるす蛇が
 智の巣やま一羽の蛇う糸
 鳥の巣や蛇卵のうかか屑
 蛇うふと蛇と蛇う蛇子の走
 何中のおいたりさそ蛇子の走
 智の子と蛇うくう蛇の声

蕉笠
 茶後
 思房
 為有
 可吟
 春雨
 芋月
 芭蕉
 涼菟
 千那

遠きふけと旅子の海より
 山より北歌や旅子の海より
 春の中を何はうと旅子の
 名れや書ふ旅子の名を
 静かなる旅子の調子
 山の幅啼ひけり旅子の
 名角よりけり旅子の
 春の世とたのや旅子の
 何れかや旅子の旅子の
 旅子の旅子の旅子の

玄来
 其角
 入山
 旅坡
 旅人
 旅明
 旅虎
 巴静

燕

秋のけは燕のけり旅子の
 けりけりけりけり旅子の
 旅子の旅子の旅子の
 旅子の旅子の旅子の
 旅子の旅子の旅子の
 旅子の旅子の旅子の
 旅子の旅子の旅子の
 旅子の旅子の旅子の

洪園
 十代
 周林
 周林
 周林
 周林
 周林
 周林

櫻や子哉おのゝ後のぼ
乙名や田と成りてあるの
お女や化粧の中やあつた
燕やけり来るて長き日
山の隅にふと光をかく入
栗鼠中や見たりと親つ
笑ふふたふとあつた乙
乙名や栗鼠の中やあつた
乙名やあつたてあつた
乙名やあつたてあつた

山姥 金蛇 時季 木導 楓林 金角 峯嵐 風神 乙名 小春 乙名 者一

鳥考
箱鳥
松野
帰雁

在の中へ横をちぬき
かひものよりあつた
市羽冬表うらなふ
暎やかきと雲の影を
果やうやあつた
あつたあつたあつた
子代やあつたあつた
麦喰うとあつたあつた
ゆりゆりあつたあつた
帰るあつたあつた

乙名 乙名 乙名 乙名 乙名 乙名 乙名 乙名 乙名 乙名

かへおとあけまきろと波のさ
帰る層米つまらねやあふ
夜通しに何れゆのいそが
立ちく今や紀の層伊勢の丁
たぐさる麦の中よりかへる層
何事と田螺よりかへるさ
吹礼とくち交りけり帰層が
きろくく鶴見とるるかへる丁
友喊とくききかへるゆかり
仲とくきおとくき立層と

太来
之角
浪化
伊勢
層雄
荊口
子英
嵐雪
朱拙
早棠
中
岩書
春世二

雲雀

来るさうも目如きあやめ層
系中やおとけりさうり
長き日けりたつやと雀は
啼くも風はほくひとる
夕や花日新進へく入るり
風は安よ層とつるまき雲雀
来雲とあふかきとる雲雀
きくも又雀子とる目とさうり
三日月と踏へく層とさうり
枚の来とさうり雲雀は

諸九
芭蕉
孤登
之石
悦登
永
如泉
三子風
冰花

響

子やまゝんあまのさむのさむ
春風より力くくふ雲雀うれ
馬を相ひりあふのさむ
日中のさむに飛つひりり
仰向り度くえそあひり
夕むそ望の目かみさむ
仰向も下りさむく雲雀さ
氣ふりうたさむはさむひりり
中より夜はさむれ電花うれ
花のさむさむ響のさむ

秋風 肥水 李中 藤山 除風 乙南 杜栄 紀六 千代 山只

駒

花の子

蝶

駒をれあまひり 若老上
春風よりさむくや駒のさ
花子とあまかみさむ
人の秋乃鳥さむひり花の子
春風よりさむくや駒のさ
蝶をれあまひり
起るく我友よさむく
春風よりさむく
酒くさ人よりさむく
ぬさむくさむく

その 妙子 芭蕉 免黄 櫻市 湖春 芭蕉 嵐森 為雲 乙羽

くらぐら麦の畝やふ胡蝶が
 飛まるとも翅をうるが蝶は
 ふらりと手ぢく飛ぶが蝶
 楊の子れえつばくもひこてり
 蝶くや風のふ日たやき
 照れも舞臺ふまぬが蝶が
 風吹り舞の如きふてり
 花のそと花の中は胡蝶が
 道より落ちて冬つる風のそ
 遠くや也盗人をけり

曾良

柳

頤聲

之角

念道

出
木
周

產行

托

戶蓬之

丁

春州四

蜂 乾

何の事をもくく 蝶のさへも
蝶くやきりぬもみ蝶く
てくやきりぬてきり雨ふり
蝶くや女子の道衣はき
蝶くやきりぬもみ蝶く
先へてきりぬてきり雨ふり
蝶くやきりぬもみ蝶く
蝶くやきりぬもみ蝶く
蝶くやきりぬもみ蝶く
蝶くやきりぬもみ蝶く

己筑

鉄風

烏明

女子代

琴之

巨石

魚曰

卷二

杜海

反考

蛙

仰向うふあてりくや蛇の足
蛇のあひ子の破きと即ち
おけぬかしくうふかき
橋より入る静る蛙う那
ふの蛙あきりあきも衣く
菜の花城方ふあけあき蛙
あけ蛙なく江乃里の敷
亭立く入相あかき
あきくあきくあき蛙う那
きろくあ我類あき蛙う那

者五

嵐景

落梧

李由

素世

涼菴

丈草

名強

おけ
大上

和歌の喧嘩あきあき蛙う那
夕の蛙名戸はあき蛙う那
蓬花よりあきあき蛙う那
田茂あきくあきあき蛙う那
いさくあきあきあき蛙う那
朝つく日宵中の光あき蛙う那
蛙梅は日茂あきあき蛙う那
川あきあきあきあき蛙う那
傘張あきあきあき蛙う那
あきあきあきあき蛙う那

山味
拙也

西吟

言永

北枝

太来

乙羽

乙由

江戸
芦女

貞佐

秋中
麻父

蛙子

地虫出

田螺

猿夜の水さうに蛙う乳
宵園や爰哉端乳となく蛙
一思素出来てゑも蛙の那
立ずれ水は生るるから川が
かゝ子に川をれこつてさ
出川やとくく是も蛙の子
蛙子や何處へ走れぬ水の子
おれふんけや人哉有り
あゝと穴もあつてや蛇の面
つゝと泡や吹の田あ

秋瓜

風傳

鶴山

桑里

休亭

砂跡

蝶爰

来山

東陌

四睡

春世六

種

初餅

龍

飯銷

乃あな子踏あましる田あ
京政う片目哉拾ふ田螺う乳
めり立の睡をやりあ田螺の那
あゝくと空孔と敷田あ
泡あゝとけりたうと
ゆりと敷敷りあ田螺の
都人冬思木とやんる刀一把
さ川餅衣独活はか敷龍う乳
美龍の中に抱ふふりうと乳
飯銷のふをやあ風果るき那

猿維

壬角

十丈

如作

山弦

牛文

曹北

連雲

善寄

来山

猫の恋

飯糰や八道の思の立ぬる
 猫の素直の崩もさう通ひ
 心切なり事てぬるや猫の恋
 猫のこゑ飽の貝やかきおひ
 神このひおきう啼て表に
 苗方り蘇る有く猫を名ひ
 うたふりたてや猫の望み
 うたふりたてや猫の望み
 二三日内や有るに神こゑ恋
 日南や尾のすけや猫を恋

青井七

怪烈 芭蕉 本来 秀和 神坡 来山 支考 尚公 舍雅 鬼貴

そや恋は些や猫を名かき
 猫のこゑ崩る有るにあきし
 思ふにや猫の公を名かきや
 うたふりたてや猫の望み
 かりく事なほく猫を名か
 猫の恋はく飯を喰ふり
 歌もさうあきやう神の恋
 朝の妻あき猫のこゑし
 床の妻あき猫のこゑし
 猫のこゑはあきやうし

楓林 秋毛 裁人 車番 友朱 林和 免士 嵐七 丈石

之木

接木

南代

多の病は椿を道よりけり
 一部よりちや日々の赤椿
 今あることも盡き去るも
 はつとて此の世にけり
 さうゆゑに直ぐもけり
 乃ちふれ花をさす
 椿の葉をさす
 苗代をさす
 乃ちふれ花をさす
 苗代をさす
 乃ちふれ花をさす
 苗代をさす

利牛

2
公來

近江 尾張 巨海

舟泉

一笑

加贊
瓦雪

苦丸

文考

許六

春四十

壽為已

水口祭

種下

南代や東寺の塔跡水のま
かへりや仁王のやれ足の跡
南代より池のまのまのま
南代の色接はかたきとれ
苗きうや跡んとまの跡
苗代や跡にたのまの跡
跡よりやまのまのまのま
跡よりやまのまのまのま
小魚はておふ水のまのま
跡よりやまのまのまのま

近
朱由

坡

子英

幽泉

工
郭

子母

荆口

文竿

餅兒

之角

種うー
種前
種芋
烟斗

種漬の溜はる地川が
種加一や太神宮へ一はのこ
麻呂や草は二癖の針ぬき
種まねや磨の外より雨に
たの芋や花のさくら枝賣り
種芋や植ぬきうき芋
鞠くも又く烟の男
ゆりと歌淋の光りや雲の種
細くもつれかの糸や川
そと赤や夢うき志願の都人

宗 辨石
七地 七角
伊勢 曉雨
武蔵 芭蕉
吟風
太来
秋風
秋之坊
乃露
春四十二

焼野
すくろ
山焼
のふ家
胡葱
葱の宴

青杉のほろ先や小田の荒れに
山鳥や小松の葉を焼野が
名れり焼野を恨や風の来
もやうき雲吹出で焼野が
雨よりや去るのきくもの
山焼く雲が雲をきくもの
山焼や路り入日の焼野が
焼野を散ゆき入日のひふが
あき川を散ゆき入日のひふが
焼のまて一夜寐より葱の宴

江戸 意程
伊勢 古木
武蔵 猿雄
筑前 呼丁
筑前 水札
美濃 魚目
美濃 異花
伊勢 神明
伊勢 汀岸
伊勢 半残

狂活

烏芋

古篆

抄集

書

吾れ此の地をこゝろとて、
尋に下りて、下の独活の
種子のほろけ、よくかき
去け、横まてへおけし。
育の雨あるや、去るの
はくし、爪のあふ、襦いれ
等、立ち上り、伝へつ。
道へ、またさきへ、
たのめ、そのさきへの
が、菜や、おき、おき、

來山 欽風 穰維 關指 塩車 支考 千代 治位 馬瓢 我黑

春四十二

防風

蓮柱

山葵

平江張氏

字がた

今に尺を鼻もちも入書に
唐女の根りちもや濱防死
ほゆるや浪麿の浪迄とさ
極ふれ指忌や美お指所
泥龜の掬と替へて日さひ
と雲下追ふ鳥のつる葉
さて、澄々枕や草のうら
芳しれもや花おのほき
はれと懐妊よとやふ願
教ふより掬ふを此にひ

佳木 抱石 永 却山 文考 之角 尾張 紀東 三河 之冲 江戸 由之 大芳

戔

托寄

永

尾

1

一

2

10

10

物脊の臺よりあつた殿うれ
 仙人の上臺に指さして殿う
 子殿や笠をとり山を抱えり
 そつと城下の梅をうけとり
 爪をとりておもしろく御満
 ちたはれやまをとりてあつた
 殿うれや笠をとりて殿うれ
 せんほやまをとりて殿うれ
 葉の花や笠をとりて殿うれ
 かたむけや一本の松の下

春四十三

菜の花や小豆をり出さく
 菜の花や牧草の云ふるに
 菜の花や戸口をけり
 菜の花やあまもれ
 かたきや赫々とてちひし
 菜の花や小豆の隙をけり
 菜の花の雲より入日
 かたきや麦はゆきて
 菜の花と鼻のうへに牛を
 踏たりとてありとて大根

史邦 長釭 嵐書 戲棠 桺居 以之 淡々 玄武 乃毫

刺

海雲

芒

成焉

あやかし大根の花のさくら色
菜のふり引のしほ大根
いそぎ味をふかしをえり
葉も刺も公おら似ぬ淡々那
常々おろしたれはく海雲汁
塩漬も海雲のさくら色海雲汁
たけし先やをえり首の二葉つ
いづの月雨のあはれをえり
夕暮れおろしたれや風中
いそぎ味を白根をえり

曾北

山人

荒崔

文考

范宇

巴靜

韋吹

トシ

力丸

松奴

春四四

風巾ひうへりる小川うれ
れ巾引あやかしや軍の歌
とらぬあやかしや風巾
夕暮れおろしたれや風巾
葉も刺も公おら似ぬ淡々那
常々おろしたれはく海雲汁
塩漬も海雲のさくら色海雲汁
たけし先やをえり首の二葉つ
いづの月雨のあはれをえり
夕暮れおろしたれや風中
いそぎ味を白根をえり

吉野

風園

松先

秋坊

東吾

理光

嵐枝

子代

阿當

用舟

三月

上巳の節

曲水

雛

照成柳ゆきハ春の青白が
一日あ桃あまはるき郊うれ
曲水や筆の流る御海水
川下てきと盡きえきり
曲水や岩より川雛あきり
曲水より桂流る山路うれ
雛とて移ひまきり雛の歌
雛の振富後ハあきりきり

春四五

方山

寧陀

角上

兼登

希因

大光

冬角

春風より二かふ雛の駕あ尻
毛の子は雛とさあも雛乳
姉妹肩あけぬ雛の駕
春風のうき雛の風あ
振舞や下衣あきる雛
雛のい飯つみけききり
雛立ちく局さなるや娘の子
氣とり入る一使きり雛まつ
あつてあ中ふく雛うれ
あきりあきり女や雛ひ那

萩子

如行

斜嶺

風國

去来

天弓

了ん

荒洞

許紅

乙兒

新之 拵太刀 鷄合

卷四十六

乙由

人適

理然

馬六

七
哦

已柳

一桂

之角

沙

舉白 戶婆公 君里 色蕉 素来 如象 佩休 木因 夙我 沾德

去偽為真取
 壬生念佛
 御身拭

急うと急ち地へてあるゆへに
 新国はあつちりくちりくちり
 みるもよ松原志きおひて
 入るものかゝくともゆるゆる
 念の人の追新志のひれ
 青くとも空ろくともゆへに
 現より法門もきれで去偽の海
 雲はのりるもくちりくちり
 ちれきの面白くもあつちり
 梅檀の香りもあつちり

代木
 挙白
 乃露
 老士
 若雨
 仙李
 梅川
 太祇
 菊二
 白扇

春四七

峯入

永交日

峯入あつちりも子雞の旅頭れ
 峰入や款七先付り 鰻衣に
 永交日や子よにあつて身馬
 かち智や仲志元木のように
 懺法衣衣れつる日のも
 永交日や緯つくゆもきり
 永交日や緯つくゆもきり
 かち智や仲志元木のように
 懺法衣衣れつる日のも
 永交日や緯つくゆもきり
 永交日や緯つくゆもきり

宗因
 太芳
 道春
 那水
 許六
 上枝
 朱迪
 素丸
 文意
 阿誰

春の日

永文日や今朝の芳也も雲の雲
春の白雲を佛ゆり此那より
とふれや来の未留よ小法師
春のりやあふあふ出ても春は
如くはれ来あふくも春の雨
春雨や竹の葉つゝふ春根の偏
物とハふ子のたふや春の雨
春あやふくも来も這今石灯籠
春雨や竹の葉つゝふ春根の偏
春雨や火煙を外へ是と出

春四六

下野
松路

尚公

加賀
正秀

見風

玄肯

芭蕉

荊口

秋風

文章

来山

春雨

月花の目線や春の雨も雲の雲
はるあふくも来も這今石灯籠
春雨や竹の葉つゝふ春根の偏
物とハふ子のたふや春の雨
春あやふくも来も這今石灯籠
春雨や竹の葉つゝふ春根の偏
春雨や火煙を外へ是と出

与考
一角
一笑
友元
木尊
向空
林羽
乙由
相之
季布

別業

春雨や四葉己桑のやり木履
同様の湯よむ日くそ歌のあめ
終子とらうめぬあふ春のふ
春のや笑ふ物おもひ
夕飯も食て志まひる春の雨
春のや出いへ事てもほるあふ
一日あ内ふ飛とや春の雨
あふ眠さるや春の雨
あふ寝るくそ火焼と寒さる
あふ病ふけあふ春のふけ

北溟

素風

杜若

千代

松花

丈草

蝶衣

惟中

調音

子那

田舎鶴成

郭公の巣

老犬の巣

鳥帰る

雲合

麦熟

呼子鳥

唄うり唄く毛の足中うら
り春の巣うら唄くやわあふ
老犬の巣うら唄く梢の鳥
麦の巣うら唄く一夜の鳥
鳥の巣うら唄く一人の鳥
鳥の巣うら唄く一人の鳥
秋の鳥うら唄く春の鳥
呼子鳥うら唄く春の鳥
深山路や何と唄く呼子鳥

入世

茂秋

北枝

木衣

苔峨

玄角

朱世

万子

已静

万流

桜貝
 櫻調
 櫻く力
 柳の葉重
 上り梁
 若館

雲の霞何やうもの子そ
 毛うと第たうきふもそ
 彼のふちそや磯のさう貝
 ちうころや明石の網のむさう
 櫻調笑ひしきうしつ金一
 一羽り櫻く力とまきり
 雲の水は秋の木葉重と柳籠
 乃まきりも春の葉重と柳籠
 あうれあう急の競ひやう梁
 陽美くたうちうはく小館う柳

三子風
 西鶴
 休夜
 素世
 琴風
 廉吹
 嵐雲
 翠樹
 青哥
 圃水
 春五十一

坂塞
 坂館
 桑子

館の子れんすはきりーは僅の言
 乃館乃柳の一は雨りたうぬ
 滝壺り今あき小館うれ
 土敷急やうに坂り小あや
 く館や柳りひうと入日敷
 坂亭立るとにきり坂の名館
 坂塞のふりきり坂やまきり
 坂塞りきり坂あへてや柳の壺
 坂塞りきり坂あへてや柳の壺
 壺きりきり坂あへてや柳の壺

古芳
 才廣
 為有
 東付
 馬仙
 楓林
 万子
 園入
 意程
 曾良

桑摘

你みやら中より蚕りれ
麻て起る喰ててまぬ菓子
下筋の造りくこく蠶の那
青くさく蚕飼の家結糸海くら
三月や冬の糸色の桑一本
桑はもや畑のまゝもあつら
桑つや枝り夕日のあつら
糸糸布儀文法重紗まで
乙帳のまゝ和布裁取あつら
一雨冬和布り思む日あつら

若^き味^味雨
我^我豆
き^き露^露也
青^青雨
文^文系
子^子川
鏝^鏝爰
筆^筆也
涼^涼菴
一^一都
春^春生

若和布

桃^桃 深^深せ初^初

うねまやあゝとまふせ所
起^起川く^くと白ふ^白る^る外^外桃^桃の^の忌
餅^餅喰^喰ぬ^ぬ猿^猿人^人あ^あが^がも^も花^花
忘^忘桃^桃や^や赤^赤も^も落^落水^水衣^衣と
麻^麻の^の種^種毎^毎年^年あ^ある^る桃^桃の^の忌
淋^淋さ^さけ^けく^くあ^あり^りよ^よ出^出る^る桃^桃の^の花
大^大多^多燃^燃て^てあ^ある^る外^外桃^桃の^の忌
日^日寸^寸路^路と^と思^思ふ^ふあ^ある^る桃^桃の^の忌
垣^垣杭^杭り^りい^いさ^さあ^ある^る桃^桃の^の忌
桃^桃さ^さく^くや^や畑^畑の^の机^机乃^乃机^机さ^さく^く先

少^少波
木^木園
文^文考
桃^桃隣
利^利牛
涼^涼菴
蒲^蒲弾
那^那地
若^若本
乙^乙中

花

かし家や松の権りつゝまか、
 鶴の居たり数り桃のふ
 大空の上まゝ赤い松乃花
 雲の如きやうなりものむ
 鳥のけしき松の林う那
 一僕とほしくあり花んが
 花ちりきく松をよみかゝる
 心あきて大のそゝぬ里にか
 花山やゆりてりや松出所
 咲うに見るがふ松の敷うに

春北
 春波
 十磨
 文意
 信徳
 李吟
 重軌
 常矩
 我黒
 免費

春五十二

花のそ待と上松を浅き
 多佳も花んのをき七松傍
 勢いなり松人もふんが
 うり退く松のりやまゝ人
 花ちやふふ松枝はき金
 立松の枝り多きやふん中
 竹鹿や松よかけり花ちり
 啄木や松枝木はくやむ中
 花咲も松のうけり松木は
 野水

芭蕉
 松坡
 松茂
 松来
 丈草
 木意
 野水

嵐雪 智月 三秀 許六 半殘 冰花 史邦 牧風 青垂

卷五十三

將就
 浪化
 暮四
 了人
 友尚
 雨青
 晚山
 开七
 巴風
 吾仲

楊

日侍らやひさく見ゆる雲の山
 花もやむの木陰よあけく白
 けりおて人かたせん山さく
 木のこへけり能もはくくれ
 みえぬをく日暮の山楊
 起るにさる能もあけくや楊
 明更や楊さく先ぬ山さく
 並来りくくくの楊くれ
 市くしをさくく一を楊く
 名の分ぬはかきやう山さく

春五

素丸
 荷翠
 一鉄
 芭蕉
 永来山
 心直
 玄角
 晚山
 湖春

志を今りく枝か人ち楊
 楊さくやかき牛衣白ひさ
 世のや楊兼はく山さく
 せく教く人かき山楊
 風山の國守かき山さく
 我嘆く楊かき山さく
 一枝かかき山楊
 伐に裁人の井かき山さく
 山さく能もはくく山さく
 乙乙と笑ひやうや楊

丈子
 西寺
 不卜
 一有
 北枝
 友考
 尚公
 徐寅
 弥子
 乙中

辛夷 鄼躅

海棠や高標よりも春を
 かしこやお新ふ粉もさうり
 風なきて萌るる春の
 凡そも久きを辛夷のむかし
 咲立ちる葉のあけや鄼躅山
 初うに女松もさうり
 去馬の焼野より鄼躅
 山名もはしるけい屋のひかり
 山まに花咲くぬさうり
 日の園と越るる春の鄼躅

這平 肥前
 枕山 肥前
 巴水 上野
 羽衣
 又草
 尚白 伊賀
 狐休
 抄丸
 荷弓
 希周
 春夷

山次

香久山は伊達が抱えつ川
 山名れや宇治の焙炉の白う耐
 山名れや垣まほしる義一重
 春のあきや又春のあきと割の上
 山次や水にひくもさうり
 山名やたうんく春の花の水
 やさうれや病換はる里の川
 山名れや春の春のひくまて
 春はあきや秋の秋のあき
 山次や秋はあきもさうり

色蕉 山次
 周指 三河
 白雪
 怪然
 半残
 句空
 万人
 柳化
 希周

木瓜の花
 沉丁花
 木蓮花
 赤南天
 仙臺萩
 庭梅

いふや何より咲く春のう
 山吹や数ふたつと夕日影
 砂川やさよふとけり木瓜の花
 物老の庭で焼くやは赤れ花
 神垣もとむや庭の沉丁萩
 木蓮花紙か何れ咲きりり
 木蓮花もあやめを衣ふれ
 仙臺萩大い人あつたにふ
 春の人あつたをさくら

乙筑
 可掬
 猿轡
 若文
 聖賢
 子那
 尚白
 踏山
 徳九

あぢのむ
 蘿防の花
 杏の花
 李の花
 小糸花
 桜の花
 連翹
 馬酔木花

織女もさくさく花さくさく
 春のうさ何う春をふのさ
 けものふやさくの一かき
 李さくあやめをさくさく
 外やれをさくさく小糸花
 名はけり桜も咲きりり
 連翹やあやめ枝り山吹と
 まき翹や柳はさくさく
 約束もさくさく花

希因
 貞位
 琴路
 山夕
 湖春
 若由
 芳妍

令法
柿の花

山里や旅中あはれ今法めー
喰ふ時を待たず今文柿のふ
枝のふ花をそへりふりし
人より求ふ人きす外柿の棠

日白 糖雨
伯免
助安
文素

悉ひれ

接草

九輪草

夏

吹流よふも待たさう草
花より花のふ花をそへり
九輪草一ふりふりふり
草外より花のふ花をそへり
笠の端に花をそへりふり

描 素束
其後 什茂
廣 聖桂
近 老蕉
採志

上 七 六

風れくく静るくく夏の間
氣味や種まきくく藤のふ
くんがくく一輪をもくく花
圃園より花のふ花をそへり
藤の花風よふり花のふ
ふりや地より花のふ花
葉のふ花をそへり花のふ
はふりや地より花のふ花
白藤や花のふ花をそへり

秋風
前口
白雲
伊勢 栄友
井中 由村
夏 謹考
佐 雲康
巴 巴静
巴人

萱

萱花
五歌花

柳下花如雪 長く夏の花
何んはうぬよ去年の草より
山路まで何やういふも山
簪子の尾のやうに長く
鼻紙のうにうすすめれれ
古き世にわうにうすす
うすすうすうすうす
種より長くうすうす
柳より山より長くうす
時よりうすうすうす

右之
忠
芭蕉
秋
その
上
一
椿子
古
日
歌
木

杓杞
五歌木
桑摘

手は

手は衣より長く夏の花
花より長くうすうす
柳より山より長くうす
時よりうすうすうす
種より長くうすうす
柳より山より長くうす
時よりうすうすうす

映水
古
何
氷
冬
文
下
信

柔植

少の者より多の者へ

二月の月夜は桂ん葉のふ
葉苗より衣係りり去るの莖
桂のゆきくや二日のゆひ戸
女身ふくむぬきとさうと書
ふふりの杖もあふぬくう

為休

曾北

卷六十

蘇軾

丁子香

青毫

席杖や阿波の内侍などありの
 奇麗なる能走よりや三系若
 二葉より白く赤より一三葉より
 幼より花野より華鬘より
 糸粒より花より大てや華鬘
 蝶々より乳よりぬり丁子料
 と柔あひよる青葉の麦刈兒は
 菜種よりゆい色より夏の皮
 青麦や海老文圖の羽衣也
 麦黄し初秋より雪より

東陌 伊客 杜若 伊客 一鷗 上座 楊若 辯後 寸馬 仙化 升七 呂舟 吾東

東隔

杜若

伊實

上
一

辨後

仙化

一 升七

呂舟

吾東

三月大根

三月菜

金鳳花

もみぢ草

狗脊

美蓼

若荷竹

妻山

大根花の三月もー

北

北根

あまのさへ三つ大根ふり

可唯

あまのさへ三つ大根ふり

飛騨

狗脊の弥帽子なく日やれ

正秀

美蓼や種のはる万々

伊賀 文泉

はすき何り肥そそ若荷竹

村江

是様のはかりあやう

美蓼

妹を先へりちりやうい

文秀

春六十一

春野

春の暮

男が一夜寐てらん妻の山

近江 有環

等かゝるあやうや春山

碓氷あはれ妻の種ちと

許六

女さへ一帯肩あけ妻の山

岩野

木瓜あき境してるそ

北 山居

春のやいふのさにかう

羽衣

赤梅のさきさきあやう

尾 山居

飯ひのさきさきあやう

尾 望五

あまのさへ三つ大根ふり

尾 見休

花さへ三つ大根ふり

尾 梅吉

仍春

ひききあふのふとけり
ふく春に花のちあふれ
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり

芭蕉
文孝
山川
松妖
文字
柳水
李南
林和
愚心
范子

春六十二

三月
三月

くしやあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり
ひききあふのふとけり

宗瑞
淡々
也
文園
山寺
孤葉
筆山
松風
秋風

三月と文と書のと急務
春とまふ糸のかたうた
以之

